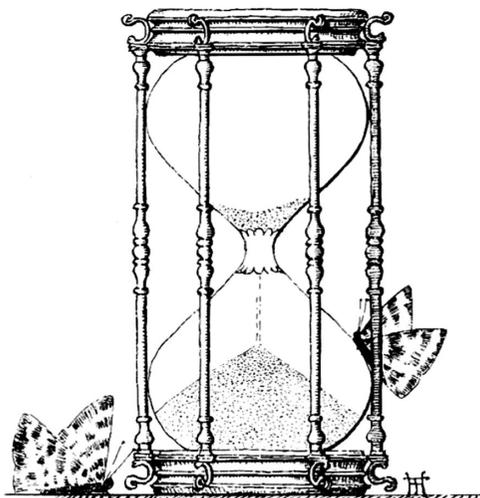


日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第89号 (2021年4月1日号)

発行者 〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学経営学部高橋路子研究室
日本ハーディ協会 jimu.thsjapan@gmail.com
編集者 麻島徳子 〒533-0007 大阪市東淀川区相川3-10-62 大阪成蹊短期大学



Hardy's drawing for 'Amabel' in Wessex Poems. (提供：渡 千鶴子氏)

感謝と自省の思いを込めて

新妻昭彦

昨年の大会は新型コロナ禍の影響で異例づくしになりましたが、運営委員会会議と総会もまた異例な形になりました。その中で、隔年で行われる役員改選は無事に実施され、私は3期6年に及ぶ会長の職を解いていただき、次期会長を西南学院大学の金子幸男先生に引き継いでいただくことになりました。この6年間、なんとか会長の任を全うできたのは、ご指導いただいた諸先輩をはじめ、事務局、大会開催校、研究発表などに関わっていただいた皆さまなど、多くの方々のおかげであると、今更ながら実感しております。全員参加型の協会を目指しながら、実務に追われ、これといった手段を取れませんでした。期せずして、少なくとも結果的には、ある程度は

実現していたのかもしれませんが。また、多くのご迷惑をお掛けしたものと思います。この場を借りまして、あらためて御礼とお詫びを申し上げます。ありがとうございました。

なんとか会長職を全うできたことで安堵感を覚えていることは事実ですし、会員に会えば、何か頼めないかなと考える悪癖が薄らぎつつあるのも事実ですが、協会が抱える難題に確たる成果をあげられなかったことへの忸怩たる思いがあることもまた事実です。協会を取り巻く数多の問題は、具体的には、会員数の減少という形で表れています。言うまでもなく、若手会員の減少がこの直接的な原因です。これは、日本の大学の英語教育と文学教育をめぐる大きな問題に起因するものなので、協会として直接的な対抗策を取ることは困難です。次世代の研究者を育成するための場を提供することは、長らく協会の重要な役割のひとつでしたが、これが十分に果たせなかったこととなります。その根本的理由の故に、この傾向は英文学会全体に、長期にわたり関わっていくこととなります。6年前も同様でしたが、現在の方がずっと厳しいように思います。

こうした厳しい状況ですが、ハーディ協会には他の協会にはない強みもあります。そのひとつは、トマス・ハーディその人にあります。小説家としてヴィクトリア朝後期全体にわたる業績を持ち、詩人として20世紀初頭を生きたハーディは、2人の作家と2つのジャンルと2つの時代の問題を潤沢かつ生産的に提供してくれます。事実、ハーディに関する研究書も論文も、出尽くすことなく続いており、小説も詩もハーディの生前より途切れることなく愛読され続けています。もうひとつは、ハーディ協会の伝統にあります。若手研究者層が薄くなったとはいえ、未だヴェテラン、中堅、若手からなる協調体制は堅固に残っており、またハーディ協会に固有の友好的かつ親和的な知的雰囲気も健在です。

こういった強みを糧に、これからの協会の運営を金子会長にお願いいたします。私も一会員に戻り、微力ながら協会の活動に加わって行きたいと考えております。

虚構／物語の復権とハーディ協会の今後

金子幸男

昨年11月より新妻昭彦前会長に代わり、日本ハーディ協会の会長職を拝任いたしました。コロナ禍の中、重責を担うことになり、身の引き締まる思いですが、自分の持てる限りの力を尽くしてこの伝統ある協会を盛り立てていくつもりです。協会は1957年10月に発足、すでに64年の長い歴史を刻んでおりますが、私の入会は1989年4月ですから、かれこれ32年になり、協会の歴史の半分を共に生きたこととなります。その間、研究発表、シンポジウム参加、編集委員（長）、版下作成係、ML委員等担当させていただき、協会は私の基軸学会でした。これまでいろいろな発表機会を提供して下さった協会の諸先生方には感謝いたします。

さて今日は、まず人文学をめぐる厳しい情勢と虚構／物語の復権についてお話しし、虚構／物語を擁護したいと思います。数年前に人文学不要論が公的に発信されました。それまでに大学レベルでは文学不要論も言われ、全国の英文学科が淘汰されていきました。ところが今世紀になって虚構／物語の復権の兆しが見えます。最近、自宅の書棚を整理中、脳科学者茂木健一郎著『脳と妄想』（新潮社、2004）が奥から出てきました。未読のこの本を読んでみて15年も前に虚構を肯定していることが分かりました。茂木によれば、近代の科学的世界観は、森羅万象が定量的なデータに変換され数字と方程式で表現できるという世界観であるが、数値化できない切実なクオ

リア（感覚質）が人間の経験（脳内経験）のうちにはあり、赤い色の感覚、水の冷たさの感じ、そこはかとない不安、たおやかな予感などが生活経験には充満しているといえます。科学の対象外のクオリアは仮想（目の前の現実に束縛されない自由な概念空間に所属）と言い換えられ、「今、ここ」の限定を超えて、「遠い星、恐竜時代の昼下がりのけだるさ、平安時代の女官の生活感情、現実世界にない一角獣、正5面体、透明人間」に思いを致すことができます。人間の精神の歴史は、仮想の世界の拡大の過程、「仮想の系譜」においてとらえられ、少女が想うサンタクロースはサンタの仮想の系譜の中にあり、暗闇に光る蛍を死んだ母親と見る小林秀雄は日本の伝統的な「蛍」という仮想の系譜に連なります。ここにおいて茂木の論から言えるのは、仮想は虚構に接近しているのではないかということです。「真」「善」「美」を含み、現実を豊かにし、文学・芸術・音楽を生み出す仮想の系譜とは虚構の系譜ではないかという気がしてきます。

ビジネス界でも虚構／美意識を鍛える意義が認められてきつつあります。山口周著『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？ 経営における「アート」と「サイエンス』』（光文社新書, 2017）は、英国のロイヤル・カレッジ・オブ・アート（2015年QS世界大学ランキング、アート・デザイン分野第1位）がグローバル企業の幹部向け訓練プログラムを用意し、企業が芸術学校や美術系大学に幹部を送り込んでいるのはどうしてなのか、テート・ギャラリーのギャラリートークにスーツ姿のビジネスマンが増えたのはなぜかという疑問に答えた本です。企業が直観的な感性と「真・善・美」に裏打ちされた美意識を鍛えることを重視するようになった理由は、論理・理性中心の経営では、複雑で不安定な現代世界で、経営のかじ取りができなくなったということです。羽生善治の曰く「美しい手を指す、美しさを目指すことが、結果として正しい手を指すことにつながる」。美意識を鍛える手段として、山口は絵画と哲学と文学をあげています。

最後に歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』です。20万年前にアフリカに現れたホモ・サピエンスが、7万年前に言語能力を獲得、認知革命が起り、物語が発生、歴史が始まったと言います。大集団になったサピエンスは共通の神話や虚構のもとに協力することが可能になりました。ハラリは国家や民族のレベルで、古代都市の神話、中世教会の物語（十字軍、病院、十字架の贖い）、法体系という共通の神話（法、正義、人権）、仏革命時の王権神授説から国民主権神話への移行に言及。その論法に従えば、Qアノンの陰謀論も中国の一路一帯構想も、EU離脱後のグローバル・ブリテン構想も大きな物語でしょう。イギリスはEU離脱による主権回復後、「開かれたインド太平洋構想」に賛同し、ウイグルと香港の人権侵害に抗議、最新鋭の空母クイーン・エリザベスを南シナ海に送る決定をしました。このように現代でもいかに多くの物語が世界を動かしているかが分かれると、虚構／物語をさまざまな角度から研究、理解することは生きた目の前の社会から一步距離を置いて冷静に眺めることを可能にしてくれるのではないかと思います。

茂木は個人の切実な仮想という虚構を、山口は企業利益のための美意識という虚構を、ハラリは国家、社会レベルの協力を可能にする大きな物語／虚構を復権させました。ハーディ研究者はトマス・ハーディの虚構物語に焦点をあてて分析を加えてきました。たとえば家父長制、ワーズワース的／ダーウィンの自然、民衆文化の消失等の大きな物語を、作品を通じてクオリアとして理解してきました。

上述の虚構の言説を踏まえ、私が今思い描いている協会のビジョンは四文字で、「知的感響」です。「会員が知的に感じ入り響き合うプラットフォームを創造する」というような意味合いですが、「知」は「地」に根をおろしたハーディにつながり、「感」は「観・環・勸・幹・歛」、「響」は「郷・協・興・教・競・驚・響・共・香」ともつながりますので、組み合わせを考えると四文字の周辺にさまざまな意味を伴っています。そのようなヴィジョンを念頭において協会活動を考えていきたいと思えます。

ここからは協会の課題について触れます。会員の研究活性化ですが、19世紀イギリス文学合同研究会が発足するのに合わせ参加を決定、その準備大会がこの6月に開催されます。ハーディ、ディケンズ、ギャスケル、ワイルドの四学会が参加、オースティン協会とエリオット協会はオブザーバー参加です。いつもと違って別の作家を専門としている研究者との交流から何かを得て頂ければ幸いです。そのほかに、『ラッパ隊長』（大阪教育図書）が玉井暲・渡千鶴子・伊藤佳子の三先生により訳され、2020年12月刊行されました。これでハーディ全集訳が完結しました。まことに喜ばしいことと思います。全巻の監修を担当された藤田繁、内田能嗣、井出弘之（故人）、高桑美子（故人）の四先生、訳者の先生方のご尽力、および大阪教育図書出版のご努力にも感謝いたします。翻訳大国日本の翻訳、それに他国にはない新書類を加え、日本の教養レベルを明治期以来ずっと高め維持し続けてきた日本の知的財産は、大変価値あるものと思います（荻谷剛彦『コロナ後の教育へ オクスフォードからの提唱』）。その知的財産の一部となり、専門の研究者のみならず、一般の方たちもハーディの作品にアクセスできるようになったことの意味は大きいと思います。この翻訳プロジェクトが終了した今、新規プロジェクトを考えたほうがいいのかもかもしれません。じっくりと考えてみます。皆様も何かサジェスションがあればお願いします。他の課題としては、会員の減少が続いておりますので、お声かけなどのリクルートをお願いできればと思います。さらにHPの新規作成や名簿改訂の要不要、『協会ニュース』の完全デジタル化は今年の課題であり、会費値上げは今後数年の検討事項になります。その他、会員の皆さんには積極的に個人研究発表、学会誌への投稿、『協会ニュース』への投稿、大会へのご参加をよろしくお願いいたします。会員の皆さんが活字にした論考や著書に目を通したり、発表を聞かせていただくと、その質の高さに驚かされる場合もありますし、啓発を受けることも多いです。伸びしろがあり今後が楽しみな方も見受けられます。「知的感響」の構築のためにも会員の皆様には最良のものを持ち寄っていただきハーディ協会に勢いをつけていただければ、これほどありがたいことはありません。最後に、ご意見等があれば遠慮なく郵便もしくはメールで事務局（jimutshsjapan@gmail.com）または会長（ykaneko@seinan-gu.ac.jp）までお願いします。

『ラッパ隊長』の翻訳を終えて

伊藤佳子

数年前、玉井暲先生から、ハーディの『ラッパ隊長』（*The Trumpet-Major*, 1880）の翻訳の件で声を掛けていただいた時、それまで私は、トマス・ハーディ全集の『詩集Ⅰ』（*The Complete Poems I*, 1930）の中で、詩の翻訳を少し担当させていただいた経験しかなく、私のような未熟者が、ハーディ小説の翻訳という大役をいったい果たせるのだろうかと不安な気持ちがないわけではなかった。しかし、玉井先生がご多忙の中、翻訳会議の場を幾度か設けてくださったお蔭で、共訳者の渡千鶴子先生とともに、読み手の立場に立った、こなれた日本語訳を心がけ、全体の統一にも配慮しながら、翻訳の仕事に取り組むことができた。会議の席上、お二人の先生から数多くの貴重なご助言をいただいたことは、私がこの仕事を進める上で、資すること大であったと確信している。

『ラッパ隊長』は、当時の批評界では概ね好意的に迎えられたという。ハーディは、当時の新

興中産階級に幅広い読者層を持つ月刊誌『グッド・ワーズ』20 (*Good Words*) に本作品を連載するにあたり、その編集方針に従って、読者の好みを意識した健全な娯楽作品を目指したと言われる。

ハーディの歴史小説とも言われる『ラッパ隊長』の時代設定は、ナポレオン戦争時であり、ナポレオン・ボナパルトが英国侵攻を図る1804年頃から、ジョンがナポレオン軍との半島戦争(1808-14)に出征する1808年にかけてである。A・フレイシュマンは、「人生が歴史というコンテキストの中で描かれている場合、それは小説であり、小説の登場人物が歴史上の実在の人物と同じ世界に住む場合は歴史小説である」と論じる。この定義に従えば、『ラッパ隊長』は歴史小説と言えよう。たとえば、国王ジョージ3世がアンと言葉を交わしたり、ボブがネルソン提督の旗艦ヴィクトリー号のハーディ艦長に海軍入隊を志願する場面が描かれているからである。一方、ナポレオン自身は小説世界に登場することではなく、彼は人びとの意識の中に、「人類の一番の敵」という脅威として存在するだけである。このように本作品は、ハーディの歴史小説として論じることもできようが、歴史小説の始祖と言われるウォルター・スコットの歴史小説とは異なり、ジャンルの混淆が認められる。つまり、歴史小説、ロマンス、コメディとしても読めるのである。このようなジャンルの混淆は、複数の視点が生み出すアイロニー効果を狙ったものと指摘する評者もいる。たとえば、ナポレオンの英国侵攻は、フェスタスがアンの貞操を奪おうとすることと類似関係にあると見なせるからである。

ハーディが『ラッパ隊長』を執筆するにあたって、スコットのウェイヴァリー小説全巻を買収求めたのは、スコットを強く意識していたからではないだろうか。ハーディはドーセット州の歴史資料を調べたり、大英博物館にたびたび足を運んで、ナポレオン戦争時の資料を渉猟し、準備を重ねた。そしてそれらをもとにして作成したのが「ラッパ隊長ノートブック」(‘Trumpet-Major Notebook’)である。ハーディが自作の、ある特定の小説を念頭に置いてノートブックを作成したのは『ラッパ隊長』だけである。ここには、ジョージ3世の夏場の海浜保養地バドマスでの国王歓迎行事、国王(一家)の動静、当時の流行のファッション、ラッパ隊長の任務や服装など、多岐にわたって記されており、それらは作中さまざまな形で活かされている。

ハーディの歴史に対する関心、特にナポレオン戦争に対する関心には並々ならぬものがあった。序文で語られているように、彼は少年時代に村の古老から、ナポレオンの侵攻が現実の脅威としてあった時代の生き証人として、さまざまな出来事を思い出話として聴く機会があった。それらが彼の想像力を掻き立てたであろうことは想像に難くない。このような貴重な体験から『ラッパ隊長』の構想が生まれ、さらに20数年の歳月を経て、壮大な叙事詩劇『霸王たち』に結実したのであろう。

『ラッパ隊長』の13章で、バドマスに出かけたアンが、警護の兵士たちに護られ遊歩道に立つ国王の姿を目にして、記録された歴史のことを、そして、彼女自身を含む名も無き大多数の人びとは、書かれざる歴史の中に身を置くことを思い巡らす場面がある。しかしながら作中、トラファルガー沖の海戦が舞台裏で行われるように、ハーディはこの作品において、記録された歴史よりも、むしろ書かれざる歴史、つまり庶民の歴史を描こうとしたのではないだろうか。彼の詩、『『国々の砕ける』時に』の中で、「一人の娘とその恋人が 互いに囁きあいながら／過ぎゆくのが見える、向こうの野道に。／戦争の年代記は夜のなかに姿消そう、かき曇りながら、／恋人たちの物語が なお尽きないうちに。」と詠われているように、ハーディは本作品で、英雄の歴史ではなく、ナポレオン戦争時に生まれ合わせたがゆえに、平和な日常が脅かされるウェセックスの人びとの姿を、いくつかの恋物語をつなぎ合わせて、一連の絵として我々に提示したと思われるのである。

最後に、修士論文で取り上げた作品、および博士論文で取り上げた作品にはそれぞれいろいろな思い出が詰まっているが、『ラッパ隊長』はいずれの論文においても論じなかったものの、今

回の翻訳で苦勞したこともあって、刊行された本を手にとると、ここに来るまでの長い道のりが思い出されて感慨を覚える。このような翻訳の機会をいただいた玉井先生には心から感謝申し上げます。

ハーディと私とオンライン —コロナ禍、私の1年—

永 盛 明 美

学部2回生の時の『ダーバヴィル家のテス』との出会いが、私のハーディ研究の入り口でした。初めて『テス』を読んだ時の衝撃、ありありとイメージされる情景の数々は、今でも私の心をとらえて離しません。それから英文学ゼミで坂田薫子先生、奥村真紀先生にご指導いただき、ハーディの小説を読む中で、詩人としてのハーディの姿を知り、3回生の時にハーディの詩作品に触れたことから、大学院でハーディの詩の研究をしたいと考えようになりました。修士課程では、水野眞理先生のもとで詩を学び、水野先生に詩の読み方や面白さ、味わい方をご教示いただきました。ハーディ作品の源泉は、やはり自然豊かなドーセットの環境であり、そこに伝わる迷信や言い伝えを見聞きし体に染み込ませてきたハーディの体験は、小説においても、詩においても随所に読み取ることができます。特にハーディのバラッドやバラッドを念頭に置いた物語詩を読むことは、私にとって、楽しい（時に困難で苦しい）体験であるとともに、ハーディの生まれ育った環境を日本に居ながらにして体感できるひと時でもあります。そして、ハーディ研究の「楽苦しさ」の中、水野先生のご指導のもと、私はハーディの最後期の長編小説（*Tess of the d'Urbervilles* [1891], *Jude the Obscure* [1895], *The Well-Beloved* [1897]）及びバラッド（風物語詩）についての博士論文を2019年に提出しました。この場をお借りして、博士論文の執筆にあたり、日本ハーディ協会会長の金子幸男先生には、副査としてご指導を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

本来であれば学位授与式に出席予定だった2020年3月、大規模な式典は中止となり、私は大学院掛の窓口で、博士号の学位記を拝受しました。まさか、その後の緊急事態宣言や大学への入構規制等、新型コロナウイルスに翻弄される一年になろうとは、その時の私は知る由もありませんでした。

こうして、2020年4月に大学での非常勤講師1年目をスタートした私ですが、2020年度は、一度も大学へ足を運ばずに終わりを迎えました。大学での授業は全てオンラインによるものであったためです。（そもそも大学で授業を行ったことすらなかったのですが）全く経験のなかったオンラインでの授業は、Zoom等遠隔授業のためのアプリケーションの操作方法をはじめ、オンライン授業で注意を払うべき権利等、授業の内容以外の勉強が必要でした。オンライン授業の準備に追われて迎えた第1回目の授業での私の緊張は、おそらく、新1回生と同等か、それ以上のものだったのではないかと思います。しかし不思議と授業が始まってしまえば、モニター越しであってもお互いの顔を見て意見を交換しているうちに緊張はほぐれ、あっという間に授業は終了していました。それから私は毎時間、オンライン授業で学生と交流できるのをとても楽しみにしていました。オンライン授業を1年間行ってみて、画像や映像、文献等を即時的に共有できることや、講義室で1対多数で講義を行う時以上に学生が質問や発言等をしやすい環境となっていたこ

とは、オンライン授業のメリットではないかと思えます。しかし同時に、通常の対面授業以上に授業の準備や課題等で先生方に負担がかかるというデメリットもあります。そして結果として、研究時間がひっ迫されてしまうことは深刻な問題です。お仕事をたくさん抱えておられる先生方は、通常業務に加え、オンライン授業のご準備もあり、大変だったことと拝察致します。「ウィズコロナ」という状況の中、学生のみならず、教員の学びを止めないための環境づくりが緊急課題となっています。

また、2020年10月31日はZoomによるオンラインで、そして11月7日、8日にはオンデマンドで、日本ハーディ協会第63回大会が開催されました。私は、「バラッド“The Well-Beloved”における男と女神の表象」というタイトルで研究発表をさせていただきました。通常とは違った環境であっても、大会開催に踏みきられ、研究発表の場を与えてくださった日本ハーディ協会の先生方に心から感謝しております。研究発表の準備では、図書館が思うように使えない状況ではありましたが、ハーディがメジャーな作家であるために、オンラインで多くの論文が閲覧・入手可能であったのは幸運なことでした。それは、長年にわたって積み上げられた、ハーディ、そしてヴィクトリア朝に関する世界中の先生方の研究の功績によるものだと実感しております。大会では、長田先生、橋本先生の研究発表、そして深澤先生の*The Well-Beloved*に関する特別講演を拝聴することができ大変勉強になりました。その後のオンデマンド大会で清宮倫子先生から賜った貴重なご意見、コメントは、私の研究の励みとなっております。このようにして、全国のハーディを研究しておられる先生方とオンライン・オンデマンドで学术交流させていただけたことは、コロナ禍の1年を明るく照らしてくれているように思われます。

第63回大会印象記

石井有希子

日本ハーディ協会第63回大会は、2020年10月31日（土）、事務局のお世話によりオンライン形式（Zoom）で開催された。COVID-19 感染拡大の影響により福岡女学院大学での開催が変更されたものである。庶務委員長・今村紅子氏により開会の辞が述べられ、その後、上原早苗氏の司会のもと3名による研究発表が行われた。

最初に長田舞氏が「*The Hand of Ethelberta*におけるヒロイン像をめぐる」と題し、主人公エセルバータが詩や物語の創作活動において自身のイメージも創作し、その「印象操作」が文芸の市場にとどまらず結婚をめぐる「市場」でも発揮されることについて論じられた。まず、エセルバータの捉えどころの無さが、受け手の好みに応じて多様な印象を生んでいると前置き。ヴィクトリア朝の広告とメディアの関係に触れつつ、彼女が自身を商品化して巧みに広告戦略をしながら人生を新たに「創作」し、「語／騙って」と分析した。エセルバータは、その後、自責の念から己が創った偶像を解体して「実像」へと転換しようとするも、マウントクレア卿が実話を「創作」と捉えることで、逆にイメージ創作の主導権を握られて阻止される。卿との結婚により「階級」を上げて新たなアイデンティティを手に入れた彼女だが、その創作活動は「個人的」なものとして屋敷内に封印され、御者や家族などの「他者」によって「語られる」受け身の存在となった結果、エセルバータは再び男性社会に組み込まれている、と結ばれた。

永盛明美氏は「バラッド“The Well-Beloved”における男と女神の表象」と題して、小説の出版から9年後に同じタイトルを冠して発行された詩“The Well-Beloved”を分析された。バラッドの伝統的モチーフや韻律等の技巧を取り入れたことで小説版では成しえなかった一人の男による女神の召喚と交流、真理への到達という神秘的体験を詩的世界に構築したことを読み、ハーディが晩年、自身が小説で描き出した抽象的概念を詩作品として新たに創造することに可能性を見出していたと結論づけられた。音の読みも細やかで、例えば第17スタンザ解説では、「幻」が消えた後、消え入りそうな状態の花嫁をthinの幽き音で表していると読んだ上で「最終行で“within”の中にthinが取り込まれ、声帯を震わせるthの音が余韻を残しながら飲み込まれる」さまを、「理想の女性の獲得不可能性という真実を悟った語り手の悔しさと虚しさを飲み込む音」と切り込まれた。様々な感覚を触発するバラッドの奥深さが、アニメ機能を駆使したpptのプレゼンによって体感できる発表だった。

続いて、橋本史帆氏は『丘の上の侵入者』における移住と結婚」と題し、短編「丘の上の侵入者」を英国における移住政策と絡めて読解された。作品の舞台となる1830年代、オーストラリアへの「移民政策」がイギリス社会にとって都合の悪い人々（貧民、犯罪者、「余った女」、イギリス国民の道徳規範に合わなかった人々など）を国外に追い出す政治的・社会的手段であったことを押さえた上で、馴染めずに帰還した者たちがホーム（家庭／国）に受け入れられず、それどころか「侵入者」と見なされて孤立感を深めた問題を、フィルとヘレナのオーストラリアへの旅立ちと移住の失敗／帰国と重ねて丁寧に分析された。更に橋本氏は、ヘレナが移住で受けた精神的なダメージから回復できずに「階級」に囚われたまま亡くなる一方、結婚しない生き方を選び取ったサリーの生き方にも着目。〈余った女〉を差別的に見る当時の価値観や女性の財産を「奪う」結婚制度のもとで、結婚を「選択しない」サリーを「社会規範に囚われない女」としてハーディは肯定的に描いてみせた、と締めくくられた。

充実した発表の後、総会にて役員改選の報告があり、新会長の金子幸男氏が新任の挨拶をされた。

休憩をはさみ、新妻昭彦会長の司会のもと、深澤俊氏による特別講演「*The Well-Beloved*をめぐる」が行われた。ピアストンがアヴィシに永遠性を追求したことを、シェリーを代表とするロマン主義的な文芸思潮と捉え、ハーディの時代にはそうしたテーマが消滅していた故に、雑誌連載時、代々に渡り似た面影をたたえるアヴィシはかえって貴重な存在であったと言及。『ジュード』を巡る不評などハーディにとって厳しい状況を経て改訂版が発行された際、作品の結末に「改変」が生じたことに注目された。シェリー的な高みを目指してアヴィシに理想を求める代わりに老いたマーシアとの結婚を描いたことについて、白髪頭のマーシアこそ人生を生きた証しであり、敬意を抱くようにハーディは読者に訴えていると論じ、深澤氏は論を終章の水道工事シーンの分析に接続して、「日常レベルの改良」に重きをおくことがロマン主義崩壊以降のハーディのモダニズムの妥協であり、ハーディの達観した人生観が、小説から詩への方向転換とも絡めて重要な要素となっている、と結論づけられた。海外の研究者や現地の人々との出会いなどにも触れられ、堆積した時の厚みと温もりが伝わるご講演だった。

初めてのオンライン大会では、回線の負荷軽減とハウリング防止上、ビデオのオフとミュートが要請されたため、会場の反応は無音の「手」のマークに留まった。ノイズがなく、少し寂しい平坦な時空が途切れたのは、深澤氏の特別講演開始前、短時間だが音声が不安定になる「アクシデント」が生じた時だった。事務局の方たちによる呼びかけや電話、ご家族のサポートも含め、生の身体を感じるアナログな場が生まれた。はらはらしつつも、スクリーンの向こうに温度を感じ、緊張が高まると同時に何かがほどけてゆく一瞬となった。

総てのプログラムが終了し、新妻昭彦会長が閉会の辞と退任の挨拶を述べられた後、別アド

レスのZoom上で懇親会が催された。スクリーンに参加者の顔が並び、オンライン独特の間の取り方に始めは戸惑いつつも和やかな会となった。Zoom画面の「背景」が揺れてお子さんが飛び出すなど、研究者の日常がこぼれ出す場面もあった。事務局長の上原早苗氏が、ホストとして安定した回線を確認するためにホテルに泊まられていること、新妻会長が様々な機器を試して準備されたことなど、携わった方々の念入りな準備のお陰で異例づくめの大会が実現したことを知った。協会事務局、庶務をはじめ、大会の運営に尽力されたすべての方々に心よりお礼を申し上げたい。

*大会後日、11月7日、8日に、オンデマンド方式のウェブ・カンファレンスが無事に開催され、質疑応答もなされた。オンライン学会をすべてにわたり整えてくださった粟野修司氏にも心より感謝申し上げます。

*ドローセットではAviceをアヴィシと発音していたと、深澤先生にご教示いただきました。

事務局よりのお知らせ

会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、年会費は4,000円です（学生・大学院生は年1,000円です）。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいています。とくに、役員の方は、ご協力いただけますと幸いです。なお、顧問の先生方は一般会費のお支払いは不要です。

なお、会費を3年間滞納なさいますと、退会扱いになりますのでご注意ください。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120 - 5 - 95275です。会費は、郵便局からお振込みください。同封の振替用紙をご利用の場合は、手数料をお支払いいただく必要はありません。よろしくをお願いいたします。

登録内容の変更について

勤務先の変更、転居、送付物の送付先住所やメールアドレスの変更など、登録内容に変更が生じましたら、お手数ですが、事務局までお知らせいただけますよう、お願いいたします。

次回大会について（研究発表募集）

次回第64回大会は、今年の10月30日（土）に、名古屋大学（愛知県名古屋市千種区不老町）にて開催されます。研究発表にご応募の方は4月30日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は600字程度、英語で発表される場合は150語程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三点を、郵便または電子メールにて協会事務局までお送りください。発表時間は25分で、ほかに5分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演の講師は、水野真理先生（京都大学名誉教授）をお願いいたしました。ハーディの詩を中心に興味深いご講演を拝聴できるものと楽しみにいたしております。

シンポジウムは、永富友海先生（上智大学教授）に中心になってご準備いただいております。昨年のシンポジウムが今年に延期になりましたので、永富友海先生に、舟川一彦先生（上智大学名誉教授）、松村伸一先生（青山学院大学教授）を加えた同じパネリストの先生方で今年も行います。内容等の詳細は次号の協会ニュースにてお知らせいたします。

《内外ニュース》

訃報：

2020年12月某日にRosemarie Morgan先生がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

会員による著訳書：

清水伊津代、風間末起子、松井豊次（共訳）『はるか群衆をはなれて』（大阪教育図書、2020年3月）

金子幸男ほか（共著）『英語圏小説と老い』（開文社出版、2020年3月）

玉井暲、西村美保ほか（共訳）エイザ・ブリッグズ著『ヴィクトリア朝のもの』（国文社、2020年4月）

木梨由利ほか（共著）『エリザベス・ボウエン：二十世紀の深部をとらえる文学』（彩流社、2020年6月）

金谷益道、石井有希子、高橋路子ほか（共著）『幻想と怪奇の英文学IV—変幻自在編』（春風社、2020年9月）

玉井暲、渡千鶴子、伊藤佳子（共訳）『ラップ隊長』（大阪教育図書、2021年1月）

《編集後記》

巻頭言にあるとおり、3期6年もの長い間、日本ハーディ協会会長の職を担われた新妻明彦先生に代わって、金子幸男先生が新会長として就任されることとなりました。これまで、協会の運営と発展にご尽力下さいました新妻先生には、この場をお借りして心より感謝申し上げます。また、新たに協会を牽引されることとなった金子先生からは、この度心強い就任のご挨拶を賜りました。会長職という重責にもかかわらず、協会の抱える課題に取り組もうとされる真摯な姿勢に倣い、一会員として、協会活性化のための一助となるべく尽力していく所存です。

1世紀を経た国内外のハーディ研究は充実しており、その重層性はときに私が付け加える論点などないと思わされるほどですが、新たな観点で論じると同じくらい大切なことは、先行研究の繰り返しになったとしても新たに読み直して論じることなのかもしれません。練り上げられた先行研究の糸を読みほどこき、新鮮な空気に触れさせ、再び論の糸を編み上げる行為それ自体に、ハーディ研究に資するものが宿ればと願います。

ご多忙の中玉稿をご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。また、今号より初めて編集を担当するにあたり、扉図版のアイデアを多数ご提供くださった渡千鶴子先生を筆頭に、多岐にわたってご助言、ご協力くださった先生方々、中央大学生協印刷部の藤様のご尽力に、改めて心より御礼申し上げます。

次号は2021年9月発行予定で、原稿の締め切りは2021年7月10日です。論文、随筆は2,000字程度、短信、個人消息は500字程度です。どうぞ皆さま、奮ってご寄稿ください。また、ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。お待ちしております。